

新型コロナウイルス感染症の影響で、聞法が大きく失われてしまいました。このような時にすこしでも皆様に仏法に触れていただけるよう、紙面1枚程度の短い法話を連載いたします。 小松教務所

蓮如上人「疫癘^{えきれい}の御文」に思う ～私たちはどこからやってきてどこへ行くのか～

当時このごろ、ことのほかに疫癘とてひと死去す。これさらに疫癘によりてはじめて死するにはあらず。生まれはじめしよりしてさだまれる定業^{じょうごう}なり。さのみふかくおどろくまじきことなり。

(御文四帖目第九通『真宗聖典』八二七頁)

※ 疫癘(えきれい) …悪性の流行病。疫病。

● 生死一如^{しやうじいちによ}

今年春先から世界的なコロナ禍のなかで、「死」ということについてこれまで以上に身近に感じた人も多いのではないのでしょうか。

私たちは平素「生と死」について、別のものとして分けてとらえているところはないのでしょうか。楽しく生きることのみ目を奪われ、その一方で死については無理やり意識から遠ざけ考えようとしな^いところはないのでしょうか。

しかしながら「生死一如^{しやうじいちによ}」という言葉があるように、生と死は一体のものとしてとらえるのが仏教の考え方です。つまり、生があるから死があるのです。言い換えれば、生を因として死という果が生じるのです。病気や事故や加齢などは、死の原因ではなく縁なのです。やや厳しい言い方をすれば、この世のあらゆる生きとし生けるものは、生まれてきたその瞬間から死に向かって一日一日歩を進めているのです。



● 命の約束事

命には四つの約束事があります。一つに、命は一人に一つしかないということ。二つに、その命はいずれ必ず尽きるということ。三つに、命尽きる時は誰にもわからないということ。三十年先かかもしれないし十年先かかもしれないし明日かもしれません。そして四つ目に、命は誰も代わってあげることにはできないということ。たとえかわいい子供が亡くなったとしても親は子供の代わりになることはできないのです。だからこそ私たちは、死すべきいのちを受け入れ、与えられた日々を精一杯生きていくことが必要なのではないのでしょうか。阿弥陀様より頂いたお念仏は、私たちにそのことを気づかせてくださるのです。



● 母から教わった生死のつながり

さて、この御文は蓮如上人が七十五歳の頃にお書きになられたもので、当時飢饉や流行り病(疫癘)で多くの人たちが命を落としたようです。しかし、蓮如上人は決して流行り病(疫癘)で命を落としたのではないということを行っているのです。死は生まれた時から定められている定業なのです。死は生の中に含まれるのであって、驚くことではないのです。

私ごとになりますが、四月の中旬に母を亡くしました。その日は早朝に病院から電話があり、大急ぎで駆け付けたのですがもうすでに意識はなく、心臓は止まっているように見えました。ほどなくして主治医が来られ臨終を告げましたが、おそらく母は苦しみの中で意識を失い、亡くなっていったのでしょう。死が生の延長線上にあることを、実感した時でした。



● いのちのつながり

今こそ私たちにとって大切なことは、私たちの命がどこからやってきてどこへ行こうとしているのかを明らかにすることではないのでしょうか。私の命は私のものでありながら、決して私一人だけのものではありません。私たちは三十数億年の命の歴史を今まさに生きているのであり、その命の歴史はこれからも後世に繋げていかなければなりません。同様に、多くの念仏者のお力で、釈尊以来二千数百年のお念仏の歴史が今日まで連綿として繋がってきているのです。今は、多くのご縁のなかで、私たちの命が存在していることに思いを馳せたいと思います。



(小松教区勸正寺 加藤正現)